知的障害者への読書サポートについて

～生駒市図書館の取り組み～

はじめに

生駒市は奈良県の北西端に位置し、生駒山地と丘陵に囲まれた自然豊かな地です。人口は約 117,000 人。大阪や奈良の中心部へのアクセスも便利で、伝統的工芸品である茶筌の里としても知られています。

南北に細長い地形であることから、市内には図書館（本館）、分館 2 館、図書室 2 室の計 5 ヶ所の図書館（室）が設置されています。生駒市図書館は、全国の人口 10 万人以上 15 万人未満の 103 市区の中で貸出数 4 位（日本図書館協会発行『図書館年鑑 2023』より）と、統計的に見ると比較的上位にあります。

今回は、中央館である図書館（本館）で実施している知的障害者への読書支援について紹介します。

1．図書館での障害者サービスについて

視覚障害者や高齢者に対しては、大活字本や録音資料等の資料提供のほか、図書館声のボランティア養成講座を開催し、ボランティアによる対面音訳、本の朗読会、録音資料の作成を行っています。

図書館へ来館することが困難な人に対しては、ボランティアによる本の宅配サービスを行っています。

知的障害者に対しては、LL ブック（LL はスウェーデン語の LättLäst の略でやさしく読みやすいの意）コーナーを設置しています。

これまで図書館界では、知的障害者は文字の理解が困難で読書が苦手という先入観や、対応や配慮の仕方の難しさ、障害特性によってニーズの発信が弱く、その意見が届きにくいこと等から、知的障害者への読書支援は進んでいませんでした。

そこで、当館では、知的障害者への読書支援について、新たなサービスに取り組んでいくことにしました。

2．読書サポートボランティアの養成へ

（1）障害者支援施設への協力依頼

知的障害者への読書支援を開始するにあたり、全くノウハウがなかったため、図書館単独で進めていくことは困難であると考え、障害者支援施設との協働が必要だと感じていました。また、施設だけでなく、事業を進めていく上で市民ボランティアの力も必要と考えました。そこで、知的障害者の読書をサポートできるボランティアを養成するための講座を開催することにしました。講座の中で行う実習において知的障害者に複数人来ていただく必要があることから、まずは、図書館とともに活動してもらえる施設を探すことからスタートしました。

市役所の担当部署、障害者団体の代表等に相談しましたが、施設側の事情は厳しく、限られた時間・人員・予算の中で一歩踏み出そうと思ってくださるところはなかなか現れませんでした。普段、図書館は施設との接点がないため、「初めまして」の関係では理解し信頼してもらうのは難しいと痛感しました。その中で、ようやく一つの施設と、文字通り膝を突き合わせてじっくりお互いの思いを語りあう機会があり、その結果、図書館への協力を快諾いただくことができました。

この話し合いの中で、施設には本が好きな知的障害者は多く、また地域の図書館を利用することが社会参加の場にもなるということで、図書館の理解があるならば、すぐにでも図書館利用をしたいという思いがあるとわかりました。

（2）館内整理日の図書館開放事業

そこで、図書館の毎月の館内整理日に当該施設限定で図書館を開放し、利用してもらうことから始めることにしました。館内整理日は図書館の休館日で職員が作業をしているものの、一般の利用がないため、障害者は周囲へ気兼ねすることなく利用することができます。20 ～ 30 人の知的障害者と、付き添いの施設の職員が 10 人程度の計 30 ～ 40 人で来館され、本を読んだり、図書館職員による絵本の読み聞かせを楽しんだりして 1 時間程過ごされます。希望者には本の貸出もします。

館内整理日に来館して利用するこの事業は、その後ボランティアの活動場所にもなり、知的障害者の読書支援を円滑に推進する足掛かりとなりました。

（3）ボランティア養成講座の開催

令和 4 年 3 月に「知的障害者支援のための読書サポートボランティア養成講座」を開催しました。この講座は、講師の一人である藤澤和子氏（びわこ学院大学教育福祉学部教授）が講座全体のプログラムから組み立てられたもので、知的障害者の読書支援について基礎から実習まで学べる内容となっています。(注 1)　藤澤氏には、図書館が知的障害者への読書支援の道筋をつけるにあたり、先導していただきました。

読書サポートボランティア養成講座

（4）ボランティア養成講座での「代読」の実習

「代読」は、読み手が選んだ本を聞き手が聞く「読み聞かせ」とは違い、聞き手の主体性を尊重し、聞き手が読んでほしい本を代わりに読むことです。代読ボランティアは、知的障害のある聞き手が「この本読んで」と言える関係を積極的に作り、1対1でコミュニケーションを取りながら、わかりやすく読むことが求められます。

代読の実習では、受講生 4 人につき 1 人の知的障害者が入ったグループを 9 つ作り、各グループで 1 人ずつ順番に代読を行いました。代読は、周囲の影響を受けにくい落ち着いた環境で行うことが望ましいため、各グループはお互いの声が聞こえない（できれば視野にも入らない）距離に机を配置する必要があり、休館日（月曜日）の図書館を会場として行いました。

（5）図書館開放事業の見学とステップアップ講座

ボランティアが実際の活動に取り組む前に、館内整理日の図書館開放事業の見学と、ステップアップ講座を実施しました。

最終的に読書サポートボランティアとして登録されたのは 25 名となり、予想以上に多くのボランティアが誕生したことはとても喜ばしいことでした。

3. 読書サポート活動の実際

（1）活動内容を決めるミーティングの実施

今後の活動内容をどうするか、図書館とボランティアが集まり話し合いを行いました。図書館開放事業で代読や読み聞かせを行うことが決まったほか、施設への訪問や、他の施設への声がけ等のアイデアが出ました。

また、ボランティアの中には知的障害者の保護者もおられ、過去に子どもと図書館に来館した際に静かにするように注意を受け、理解してもらえていないと感じて足遠くなったが、図書館でこのようなサービスが始まることに期待するという声もありました。様々な思いを聞き、あらためて図書館として知的障害者への読書サポートを進めていく意義を再確認し、身が引き締まる思いになりました。

あわせて、障害者支援施設の職員からは、施設の説

明、知的障害者の日常や特性等をお話ししてもらいました。一人ひとり障害の特性は違うこと、“困った”行動にも理由があること、楽しんでいても無表情の人もおられること等を聞き、良い反応がないと思わずに回数を重ねていく中で理解し、寄り添っていってほしいとアドバイスを受けました。

(2) いよいよ活動開始

活動初日は、図書館開放事業において知的障害者 2、3 人とボランティア 2 人程度をひとつのグループとし、施設の職員のサポートを受けながら、図書館を案内したり、希望があれば代読したりするという形にしました。知的障害者の思いを汲んで、ボランティアは自然な流れで代読を行っていました。その後、希望者を対象に絵本の読み聞かせを行いました。これまでの実習や見学で慣れておられることもあり、図書館での読書を楽しんでもらえたと思います。

後日、施設の職員から、代読の希望者が大変多く、できればボランティアにもっと来てほしいというお話しがありました。ともに楽しもうと真摯に取り組んでくださったボランティアの思いが通じたのではないかと思います。

その後、少しずつ形を変えて、月一度の図書館開放事業での読書サポート活動を行っています。(注2) 全体で 1 時間程の流れとしては、まず施設から知的障害者と職員が来館されたら、代読を希望する人（毎回約 9 人）と、希望しない人にわかれます。代読を希望せず自分で本を読みたい人は、自由に館内で過ごし、思い思いの場所で好きな本を楽しんでおられます。

代読希望の人は、読書サポートボランティアとその日のペアリングを決めて、基本 1 対 1 で横並びに座って代読します。参加者には、お互いに名札をつけてもらい、名前を呼びかけ、挨拶するところからスタートします。必要に応じて、障害特性や対応の仕方等を施設職員から教えてもらいます。代読するペアは本棚の間をいっしょに歩きながら、多くの本の中から読みたい本を探します。絵本、図鑑、乗り物、料理、スポーツ、芸能等が関心の高い分野ですが、本選びも代読も、知的障害者が主体であり、ボランティアはその意向を汲んで、コミュニケーションをとりながら行います。回を重ねるうちに、ちょっとした希望でも伝えやすい雰囲気が生まれるようになりました。

代読サービスの様子

代読の後、希望者を対象とした絵本の読み聞かせを行います。絵本の読み聞かせ担当は、当日早めに来館し、絵本を選び、下読みします。1 人 1 冊、計 3 冊の絵本を読みます。選書する際には、季節にあったもの、問いかけや参加型のもの等、わかりやすさを重視しています。

絵本の読み聞かせ

絵本の読み聞かせの後は、各自が選んだ本を施設への団体貸出として貸出します。

活動終了後には、図書館職員とボランティアで簡単なミーティングを持ち、活動の中で困ったことや気付いたこと等、感想を述べます。その場で答えが出ないこともありますが、皆で話すことで気持ちを共有し、場

合によっては出た意見を施設職員に伝えて、より実りある活動へ繋げていけるようにしています。

4. 活動を通したそれぞれの声

図書館での読書サポート活動について、アンケートやインタビューを通して届いた声を紹介します。

(1) 知的障害者からの感想

- いろいろな本を選べる。
- ボランティアとの会話を楽しめる。
- わからないことをボランティアにすぐ聞けるので安心感がある。
- ボランティアが聞いたことに答えてくれるので自分の知識に繋がる。
- 図書館での活動に参加できない人のために施設に来てほしい。
- 生駒市以外でも全国的にこういった活動が広まってほしい。

(2) 施設職員からの感想

- 地域の中に溶け込み、互いに支え合って生きていくことを目指しているため、図書館との協働は、知的障害者のことを知ってもらう機会となり、障害を持つ人の生活がより豊かなものになると思う。
- 当初、本を破ったり、騒いだりする懸念もあったが、ボランティアが障害者本人の自己決定を尊重してくれるため、落ち着いて本を楽しめている。
- 新たな人との関わりが生まれて良い刺激にもなるので、図書館に出かける意義は大きい。
- 本選びを通して障害者本人の興味や新たな一面を職員が知ることで、普段のコミュニケーションにも役立っている。

(3) 読書サポートボランティアからの感想

- 知的障害者本人の主体性を尊重することを心がけて活動している。
- コミュニケーションをとるのが難しいこともあるが、本を通して喜んでもらえて、心が通じたと思えると嬉しく思う。
- 以前は電車等で奇声をあげている人を見るとつい距離をとっていたが、活動をはじめてからは、障害のあることに捕らわれない、優しい視線を持てるようになった。

5. サービスの広がり

これまであまり進んでいなかった知的障害者の図書館利用ですが、1 つの施設の利用が軌道に乗って当事者や施設からの評判も広がり、そして、図書館から他の施設へ PR する機会もあり、知的障害者が図書館を利用することへの理解が進んでいったように思います。その後、2 つの障害者支援施設と放課後等デイサービスから図書館利用の申し込みがありました。

また、図書館南分館では、以前から放課後等デイサービスの図書館開放事業を行っていましたが、読書サポートボランティアが新たにその活動に加わり、主に小・中学生に代読や絵本の読み聞かせを行うようになりました。

また、施設に図書館職員とボランティアが出向いて、代読や読み聞かせ、本の閲覧や貸出を行う訪問型のサービスも実現しました。施設を訪問することで、図書館に来館することが困難な人へも読書サポートを行うことができました。いつも過ごしている場所でリラックスした読書を楽しんでもらえたと思います。

施設に訪問して行う読書サポートサービス

おわりに

図書館の読書サポートサービスが実現したのは、施設と市民ボランティアの熱意が大きな要因となっています。協働事業においては、普段から顔の見える関係を作り、お互いの思いを共有しておくことが必要だと実感しました。

今後は、現在の活動のベースとなっている館内整理日の図書館開放だけでなく、開館日にも利用できるような環境作りを、ハード面・ソフト面ともに改善し、サービス内容を充実させたいと考えています。

図書館が、本の楽しみを通して、障害を持つ人・持たない人の相互理解、共生の場として地域の中で機能するとともに、この取り組みが生駒市以外でも広がっていくことを願っています。

注

1）ボランティア養成講座は6つの講座から構成されており、各講座内容が『知的障害者への代読ボランティア養成講座テキスト』として、下記の QR コード及び URL からダウンロードできます。

https://www.jusonbo.co.jp/daidoku_text/

2）読書サポートサービスについて、生駒市公式チャンネルの「地域共生社会推進全国サミット in いこま PR 動画」内にその様子が紹介されています。下記の QR コード及び URL からご覧いただけます。

https://www.youtube.com/watch?v=XBPtOHX2OEI